

消防団員の公務災害発生状況（平成29年度発生事故認定分）

（企画課）

1 平成29年度の公務による負傷者等

平成29年度中に発生した消防団員の公務による負傷者及び疾病者（以下「負傷者等」といいます）の人数は、1,222人（うち殉職者3人）となっています。

※平成30年度末までに基金が支払った人数です。

（参考）

平成30年度中に発生した消防団員の公務による負傷者等の人数は、速報値（令和元年8月末までに支払った人数）で、1,207人となっています。この発生状況については、令和元年度末までに支払ったものを本誌2020年No.217で掲載する予定です。

2 活動態様別に見る公務災害の発生状況

活動態様を「非常時」と「平常時」に大別すると、「平常時」に発生した公務災害は全体の約8割で、「非常時」の公務災害を大きく上回ります。

活動別に見ると、「演習訓練」中の事故が最も多く（813人、66.5%）、次いで「消火活動」（202人、16.5%）となっています（図1）。

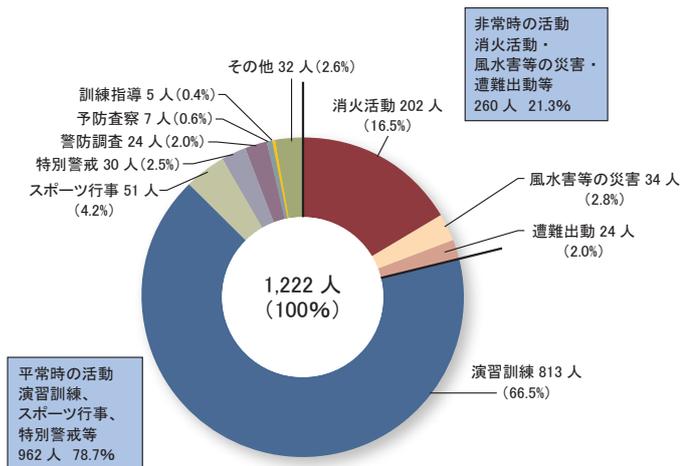


図1 活動態様別公務災害発生状況

消火活動では、消防ホースや側溝などに足を取られて転倒する、足をくじく、釘を踏み抜く、などの事故が多く見られます。

3 「演習訓練」時の事故発生状況

全体の6割以上を占める演習訓練時の事故発生状況を詳しく見ると、次のとおりです。

演習訓練での負傷者等は813人です。このうち、551人がポンプ操法の動作による事故（熱中症含む。）で67.8%を占め、高い割合となっています（図2）。

また、演習訓練時の負傷者等を事故の型別で見ると、「動作の反動」による災害が486人と全体の59.8%を占め、これに「転倒」（96人、

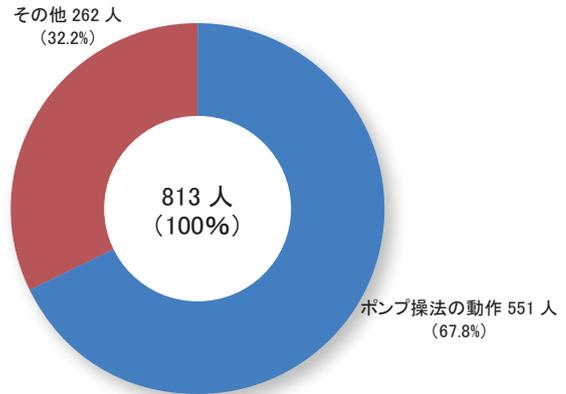


図2 演習訓練中の公務災害発生内訳

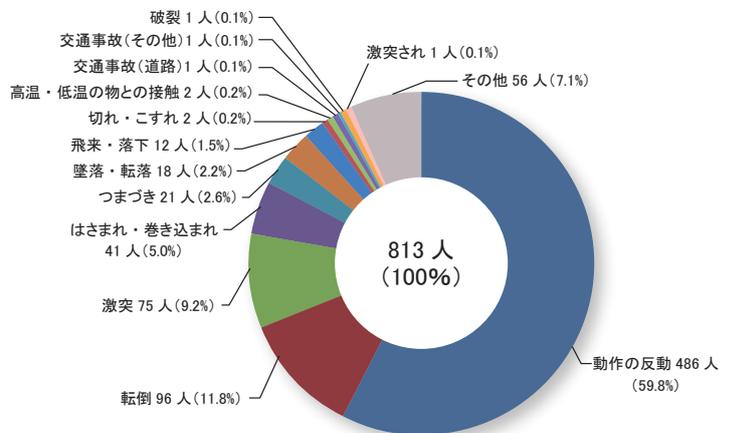


図3 演習訓練時における負傷者等の事故型別人数

11.8%)、「激突」(75人、9.2%)が続きます(図3)。

次に、傷病部位別で見ると、「下肢」が426人で全体の52.4%を占め、次に「上肢」(111人、13.7%)、「胴体」(106人、13.0%)の順になっています(図4)。

傷病名別の人数では、「打撲傷・挫傷」が447

人で全体の55.0%を占め、次いで「骨折」(108人、13.3%)、「脱臼・捻挫」(107人、13.2%)の順になっています(図5)。

なお、演習訓練時の事故事例をいくつかあげますと、次のとおりです(表)。

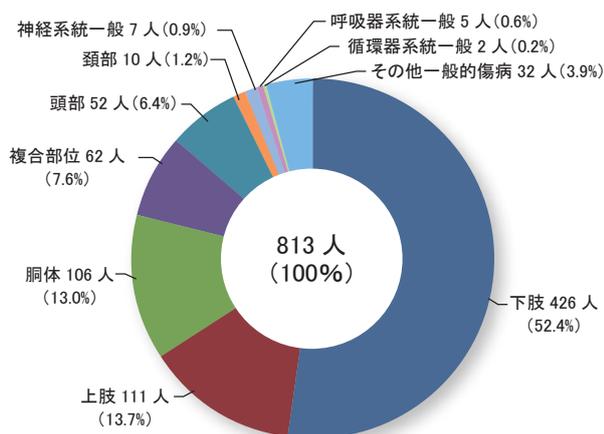


図4 演習訓練時における負傷等の傷病部位別人数

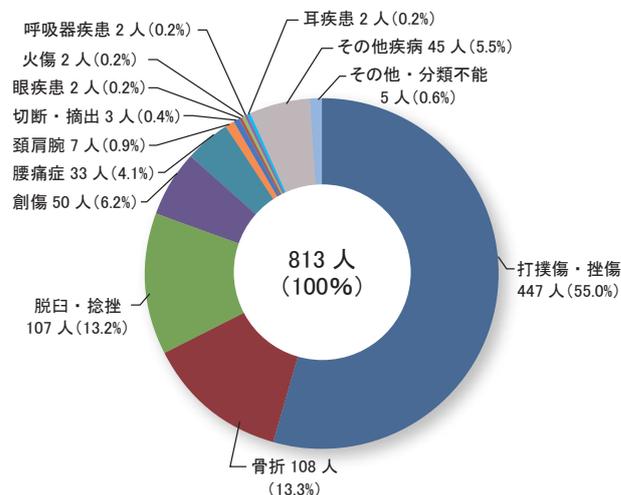


図5 演習訓練時における負傷者等の傷病名別人数

表 演習訓練時の事故の主な事例

事故の型	事故内容
動作の反動	小型ポンプ操法の練習中、指揮者として「操作始め」の号令をかけた後、筒先に向かい走り出そうとしたところ、左足ふくらはぎに痛みを生じた。(左下腿肉離れ)
転倒	小型ポンプ操法の練習中、「操作始め」の後、3番員として吸管の結合金具を持ち上げ、結合金具が吸口に結合しやすい位置にくるための搬送動作中、足を滑らせ転倒。(左腓骨遠位端骨折)
はさまれ・巻き込まれ	ポンプ車操法の訓練中、車両から降りてドアを閉めたところ、誤って右手(第四指)を車両とドアの間に挟み負傷した。(右環指末節骨骨折、右環指圧挫傷)
激突	小型ポンプ操法の夜間訓練において、準備のため水槽へ注水作業を行っていたところ、放水中のホースが絡んでいたため、ホースのよじれを直した直後、送水圧が急上昇し、管鎗を保持していた団員の片手が外れ、管鎗が顔面を強打した。(左顔面打撲傷)
飛来・落下	ホース乾燥塔に干してあったホースを下ろそうとした際、ホース乾燥塔のホース吊り器具のストッパーが外れ、ホース吊り金具とともにホース3本が落下し、ホース吊り金具の一部が頭部に当たり負傷した。(頭部裂創)

4 公務災害防止のために

消防団員の公務災害はいつでもどこでも起こり得ます。

消防基金は公務災害防止のために、4種類の研修事業(「消防団員安全管理セミナー」「S-KYT(消防団危険予知訓練)研修」「消防団員健康づくりセミナー」「消防団員セーフティ・ファーストエイド研修」)を推進しており、市町村等の行

う研修を積極的に助成・後援しています。消防団員の安心・安全を守るため、ぜひ当基金の研修事業をご利用ください。

研修事業の詳細は、お気軽に当基金企画課までお問い合わせください(03-3595-0544)。

当基金ホームページの「各種ダウンロード」からもパンフレット『研修会のごあんない』がダウンロードできます。

消防基金

検索